

1. 私の自宅の祭壇

偶像崇拜とか、神・仏・キは迷信だなどとコキおろしながら、私は毎朝、食事前に神・仏・キ祭壇正面に向かう。それでは私（大沼）の家はどうなのか、と関心があるから吾が家の祭壇は図-1のとおりである。千歳栄氏著書「日本人の原風景—神仏和合の実相」よると「山形県庄内地方では、仏壇の上に神棚を置く形が一般的。山形県でも内陸地方では、神棚と仏壇を上下の一緒に並べないで、横にずらすか、別の部屋に置く。」とある。私の経験から一つ付け加えるが、庄内地方の殆どの家では、それも居間（茶の間）に置くのが一般的である。日常の家族団欒の中で先祖と向き合う雰囲気を作り、普段の生活の中で感謝の心を涵養する環境を整えるという意味合いがあると思う。今様の「手元供養」考え方の先駆けのようなものである。

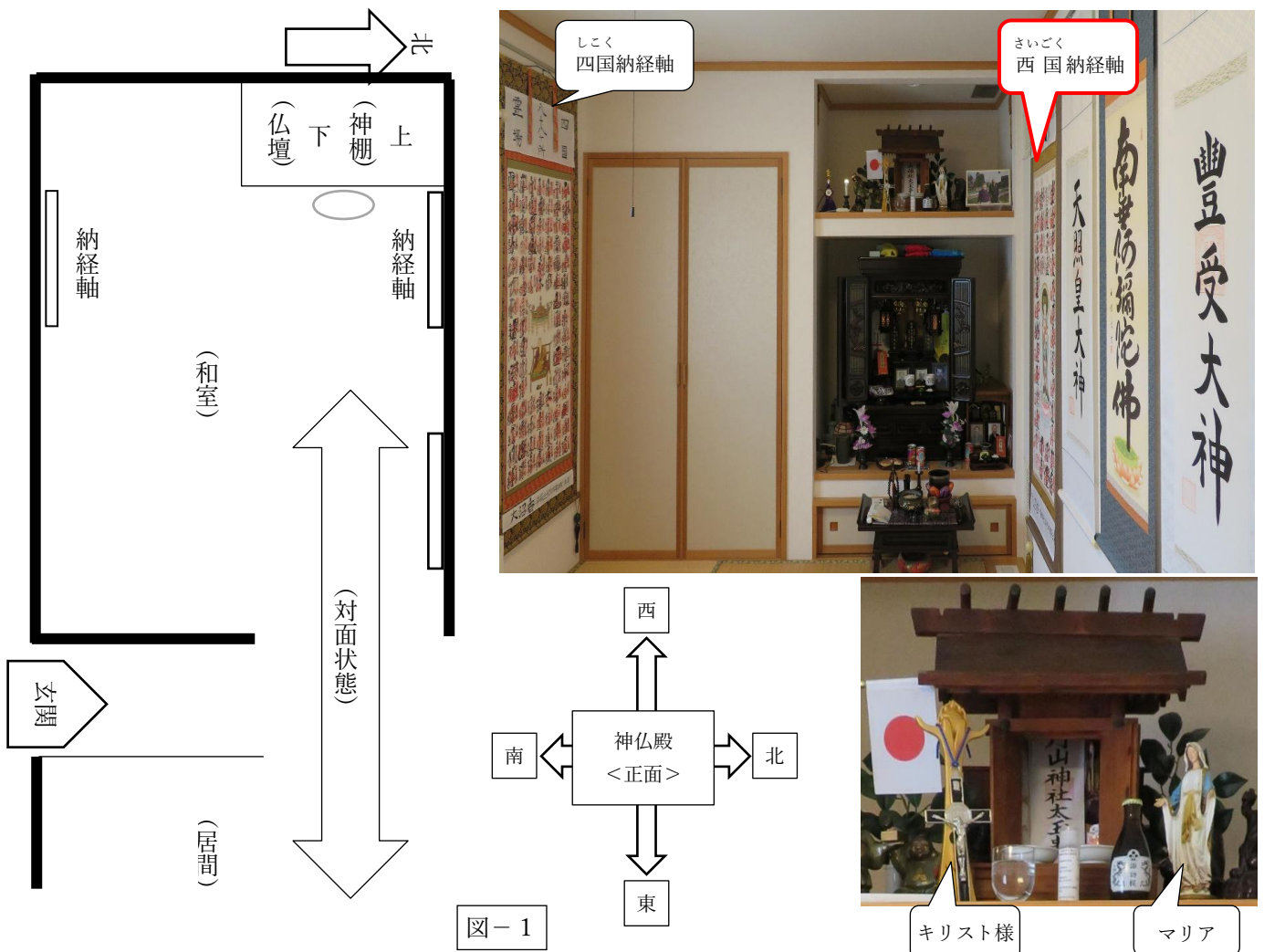


図-1

向かって左側壁面には四国へんろ納経軸を、向かって右側には西国へんろ納経軸を向い合せに飾っている、さらに、右側には、伊勢の外宮（豊受大神）・内宮（天照皇大神）の掛け軸で、南無阿弥陀仏の六字名号掛け軸を挟んで垂下・祀っている。あくまでも、心の中は「崇仏敬神はすなわち偶像崇拜」「崇仏敬神＝偶像崇拜の等式成立」と断言していることから、**私の崇敬・崇拜・拝礼（崇仏敬神）の形は、いわゆる外形・外姿のみで体裁を整える形式に過ぎない。神社仏閣に向かい拝礼する時は目をつむるが、その時は、心の中にUターン・ブーメラン現象の動きが生じて、“今の自分はなあに？”という自問である。するとパッと浮かぶのが、“自分を自分が縛っていないか？ 自由か？”である。神仏に頼む、願**

う、すぎる、利益を期待するというようなことはまったく浮かばない。

私の敬慕・私淑する安岡正篤先生は伊勢神道大成者、度会（村松）家行の名著「神道簡要」を取り上げ「情を天地に^{ひと}齊しくし、想を風雲に乗ずるは、道に従うの本たり、神を守るの要となす。」と紹介している。「・・・人間臭くならないで、人間の心情を、人間の由って生じた根源に帰し、我々の思想を風雲に乗ず、つまり、天地自然の造化というものに乗せる、これが道に従う根本原理で神を守ることが大切である。神が人を守るという観点ではなく、人が神を守るのである・・・」神が人を守るという観点は、神が先（主）にあって人が従うとの構図、だから神に願う、神に^{すが}継ることになる、そうではなく、天地人一体の^{かんながら}随神精神は既に人間の内心に備わっているのだ、その壮大な理想精神を守れ、である。何と素晴らしいことか、感激する。また、宮本武蔵は「^{とうと}仏神は貴し、**仏神を頼まず**」とか「神仏を尊びて、**神仏を頼らず**」と云われたが、これも私の考え方とぴったり一致する。

その1；神様の祭り方について。図-1において、神棚には天神地祇・八百万神一のお札とお守りを入れている。神棚が黒ずんでいるのは、私の父親が生前、1945(昭和20)年終戦直後の9月開拓地に入植したが、その時以来80年間祀って来たからである。死去後に私が引継ぎ19年以上経過している。

その2；仏様の祭り方について。仏壇は普通のもの、黒いのは黒檀材によるが、天台宗（私の両親・弟の菩提寺）と妻側の曹洞宗（両親の菩提寺）の両宗を祀っている。図-1では見えないが、奥には図-2のと通りの阿弥陀如来仏像を祀っている。

その3；キリスト様の祭り方について。神棚には、図-1右下のようにキリスト教をモチーフとした十字架とマリア像を対にして祀っている。



図-2

2. 日々の崇仏敬神の勤行

勤行とは仏教の言葉で日々の『おつとめ』とも言う、私は様々な御経や祝詞を読誦・奉唱の上で奉斎している。特に四国・西国のへんろにおいては、今に至る変遷があったこと――心が定まっていな証左!?――から、私の勤行作法を図(表)-4のように整理した。自宅における毎月15日の節目においては、さらにそれらに加えて、仏・菩薩の御宝号、大^{おほほらえのことば}祓詞、観音御和讃、六根清浄の大祓、三社託宣、出羽三山三語^{さんやまはいじ}拜詞・同三山^げ拜詞、四句の偈等も読誦・奉唱・奉納している。

ここにおいては、般若心経はメジャーなので、神様への祓詞とイエス・キリスト様へ捧げる御言葉のみを記述しておく。

○祓詞

か かしこ いぎ なぎ おほかみ
掛けまくも 畏き伊邪那岐の大神
つくし ひむか たちばな おど
筑紫の日向の 橘の 小戸の
あ わぎはら みそぎはら たま とき
阿波岐原に 禊祓へ給ひし時に
な はら ど おほかみたち
成りませる祓へ戸の大神等
もろもろ まがごと つみ けがれ あ
諸々の禍事・罪・穢有らむをば
はら たま きよ たま まを こと
祓へ給ひ清め給へと白す事を
き め かしこ かしこ まを
聞こし食せと 恐み 恐みも 白す

図(表)－4		へんろ（霊場巡り）				さいごく 西国	於 自宅 日常	
		四国						
		1 回目	2 回目	3 回目	4 回目			
実施年 年齢		2015 66	2017 68	2018 69	2024 75	2019～ 2020	----	
霊場会等の 推奨項目	献灯・献香	○	○	----	----	----	◎1	
	納札を納め	○	----	----	----	----		
	お賽銭	○	○	○	○	○		
	読 経	合唱礼拝	○	○	○	○	○	◎2
		かいきょうげ 開経偈	○	○	○	----	----	◎3
		さんげもん 懺悔文	○	○	○	----	----	◎4
		さんきさんきょう 三帰三竟	○	----	----	----	----	
		十善戒	○	----	----	----	----	
		ほつぼだいしん 発菩提心の真言	○	○	○	----	----	□
		さんま やかい 三摩耶戒の真言	○	○	○	----	----	□
		般若心経	○	○	○	○	○	◎5
		ご本尊の真言	○	----	○	----	----	□
		光明の真言	○	○	○	○	○	◎6
		御宝号(南無大師遍照金剛)	○	○	○	○	----	□
		えこうげ 回向偈(廻向文)	○	○	----	----	----	----
合唱礼拝		○	○	○	○	○	◎7	
かんのんごわさん 観音御和讃		----	----	----	----	○	□	
独 自	上記「光明の真言」の後に 『亡き両親等5人の戒名』を呼ぶ	○	○	○	○	○	◎8	
	はらえことば 祓 詞(神道祭祀に唱える祝詞)	△ ¹	△ ²	△ ³	△ ⁴	◇	◎9	
	みことば 御言葉(イエス・キリストに捧げ る言葉)					◇	◎10	

○御言葉

[父と子 と 聖霊の御名によって アーメン (指を組んで合掌)]

(額)～(胸) (左肩)～(右肩)

神よ 私は おごらず 高ぶらず 偉大なこと 身に余ることを 求めようとしない

心静かに私は憩う 母の手に安らぐ幼子のように

心静かに私は憩う 神の前にある幼子のように

[父と子と聖霊の御名によってアーメン (指を組んで合掌)]

私のオリジナルは、仏壇の中に5人の遺影(12.5cm×15cm)を入れており、毎日の勤行においては、その遺影と会話しながら5人の戒名－拓源力斗篤農居士(亡父)、芳春富耀大姉(亡母)、誠覚日剛信士(亡弟)、初陽成満信士(亡義父)、花顔妙雪信女(亡義母)を唱えている。

毎日の勤行においては、私は西側を向いていることになるが、左右二つの掛け軸からの神威・仏光の波動に包まれているようなもの、図(表)－4中◎1～◎10まで一通り終わったら、天皇陛下の四方拝――毎年1月1日(元日)の早朝、歳旦祭に先だって、宮中・神嘉殿の南庭で天皇が天地四方の神祇を拝する儀式――を真似て、

以下それぞれの所作の前に2拍手を以って拝礼し、

- ⑥¹ 北側(水気の神)を向いて、「(1拍手)豊受大神、(1拍手)南無阿弥陀仏、(1拍手)天照皇大神」、「(1拍手)北の北極星・北斗七星様、ならびに西国^{さいごく}へんろ様のご加護に感謝申し上げます」と口上し、
- ⑥² 東側(木気の神)を向いて、「(1拍手)東の浄瑠璃浄土薬師如来様のご加護に感謝申し上げます」と口上し、
- ⑥³ 南側(火気の神)を向いて、「(1拍手)南の南十字星(本当は北半球では見えない)、ならびに四国へんろ様のご加護に感謝申し上げます」と口上し、
- ⑥⁴ 西側(金気の神)を向いて、「(1拍手)西の極楽浄土阿弥陀如来様のご加護に感謝申し上げます」と口上し、
- ⑥⁵ 同方向にて、島根県松江市の美保神社長形扇(図－5左)を表裏返しながら――「家族ならびに皆様方とのご縁に感謝申し上げます、家族ならびに皆様方のご健勝をご祈願申し上げます、ありがとうございます。」と口上し、

最後に四方に錫杖^{しゃくじょう}と振鈴(図－5右)を振って終わりとしている、最後に3拍手と拝礼で締めている。

ところで、別の所で、神社や寺院の祭壇には、神仏はいるはずがないと扱き下ろしたが、もちろん、私の自宅にも神仏や先祖の靈魂が実在していない、潜んでいる訳がないのは当然のこと。私が祭壇に直面する意図は、実在もしないし靈魂もな



図－5



いといいながらも、遺影と会話しつつこの吾が身の奥底に潜んで対極している^(1人)仏性と^(もう1人)魔性の対時の舞台を見立てていることである、つまり、仏魔両者の2人対話・一人QAの所作空間を形作っているということである。

3. 菩提寺は新福山般若院石行寺(住職)との関わり

(1) 同寺における和讃の会

今は退会したが、当時の記録である。私は、山形市岩波は石行寺(菩提寺)の和讃の会に一時期入会し習い楽しんでいた。五七五七七調の三十一音の短歌に節を付けたものを御詠歌と称し、七五調の四十八音の詩に節を付けたものを御和讃と称する。御詠歌とか、御和讃というと「死んだ人の供養? 年寄りの趣味? もの悲しい?」などの暗いイメージで捉えている人が多いと思う、詩は確かに仏教の世界に係りのある言葉が連なっている――仏・菩薩、祖師・先人の徳、経典・教義などに対して和語を用いて褒め讃える讃歌である――が、もちろん慶事を唄ったものもある。同寺の佐藤住職はキリスト教の讃美歌のようなもので、仏教における讃美歌、仏教賛歌だとおっしゃられている。なるほど合点、そのとおりだと思う。温調は静かで、荘厳な響き、優雅さもあり、歌謡曲とは違った、とても平静・安穩、満足感を覚える雰囲気

気になる。習っている楽曲は、福聚教会叡山流詠歌和讃音譜集（80曲ほどの声を収録したCD-ROMと楽譜／それぞれを販売）に掲載のもの、いわゆる叡山流（天台系）である。リズムを取るための打楽器に相当するものとして、鈴（小さな鈴、左手で鳴らす）と鉦（小さな鐘、右手で打つ）を使う。単純なリズム（鳴らし方・打ち方）であるが、唄いながらの操作は私には結構難題である。したがって、カラオケの曲はない。オーケストラ演奏をバックに唱和したら素晴らしい雰囲気になるのではないかと想像しながら楽しんでいる。歌ってみると、雰囲気的には歌謡曲と詩吟の中間にあるような気がする。

さて、同寺の「和讃の会」構成と有り様のことについてである。男女20人位（女性が多い）のメンバーがいた。まずメンバーの振る舞いを見ると、皆さん、本堂のご本尊に向かって合掌する、お賽銭を布施する、般若心経を唱えるなどの所作を行っているが、皆さんの包容力・寛容性について触れておく。メンバーの中には、自身の菩提寺の宗派が天台宗でない人もおり、普段はやらない所作をここではやっている人もいたのである。次に、和讃を歌う前に、皆で「始めの言葉」を唱えるのであるが、中に伝教大師最澄を讃える御法号「南無宗祖根本伝教大師福聚金剛」を3回唱えている。佐藤住職は宗派の別の一切を問わず受け入れている。このようにメンバー共々皆、寛容で柔軟な心で対応していることに私はとてもうれしく思っている。

（2）同寺による新宅芯入れ

2009(平成21)年に自宅の建替を行い、8月26日(水)に入居した直後のことである。神棚と仏壇を仮住いから移して、いわゆる「安全祈願と新宅芯入れ」をしたく、菩提寺である石行寺（天台宗）の佐藤住職に相談・依頼し、祈祷儀式の当日がやって来た。この時点で、私の頭の中は、仏壇のみを芯入れ儀式の対象としていた。神棚・仏壇の前にお座りし、様々な御経を誦読し、「芯入れ」の祈祷儀式を終了した。「仏様」に対する「般若心経」は理解・納得した。しかし、「神様」に対する「祝詞」はなかったなあと思ったが、次の直感もあった。「ひょっとすると、般若心経を以って、神仏両方に拝んだのかな？ しかし何で一緒なの？」と心の中で呟くのを覚えた。その時、直ぐには質問出来ずにいたが、ちょっと引掛かる気持ちを持ち続けていたことから、後日何気なしに尋ねて見たら「般若心経は神様にも通じるのだよ！」とさらりと話された。あまりの自然さにその意味を追求することなく「分かった」と言ってしまった。そこで手掛かりがないか、図-6のと通りの自宅にある「般若心経」が記述されている折り畳み式のものを眺めた。その中の「心経奉讃文」が目にとまったのである。「神前にては宝の御経」と書かれており、実は一瞬びっくりした。そうであれば、神様にも、般若心経誦読による祈願祈祷の真意は通じると思ったのである。そういえば、神仏分離以前までは、神社での僧侶による読経は当たり前だったのである。また、昨今でも、自家用車の安全祈願は、神社・神職だけではなく、寺院・僧職が執り行っていることにも気付いた。

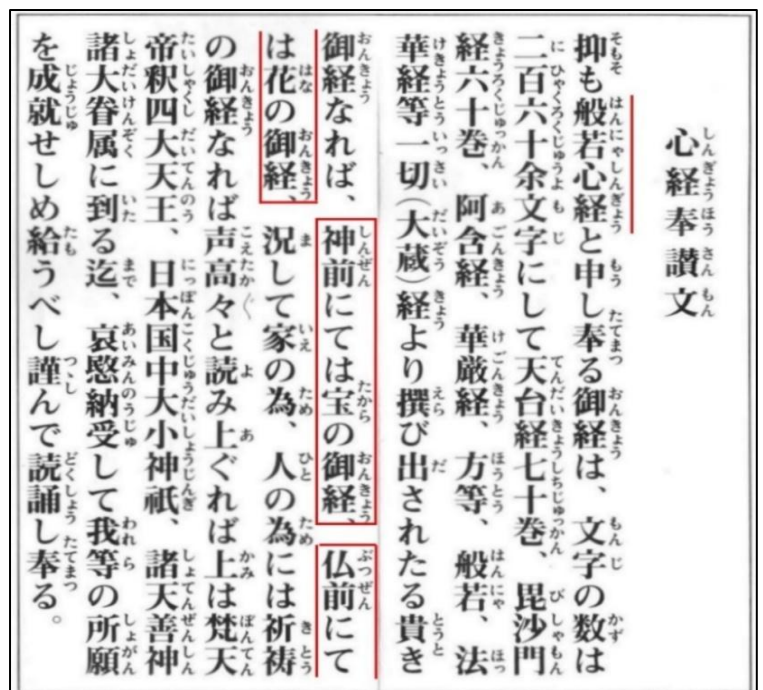


図-6

（3）同寺による「お日待ち」加持祈祷

同じく、石行寺佐藤住職との係りである。近年、毎年正月明けに同住職から自宅に足を運んで頂き「お日待ち」の祈祷・^{かし}下賜を受け賜り、家内安全、五穀豊穰（もちろん農業ではないが、あらゆる物事の繁栄の意）を祈念する。この時頂戴するお札には「普照日天子御札」と書かれている。――なお、日天子は、「大日天王」（日天子・月天子・明星天子）の三光天子の一つ。インドでは本来太陽を神格化したバラモン教の神様であったが、仏教に取入れられて仏教の守護神（護法善神）となったものである。庚申信仰に類似する点もあり、農村などでは田植えや収穫が終わった後に部落の者などが集まって会食や余興をしたとの事である。―― その時の勤行・読誦の御経は、「九条錫杖経・般若心経」などに加えて、「神」の名（^{じんめいちょう}神名帳）「天照皇大神宮、八幡大^{はちまんおおみかみ}神、春日大明神、稻荷大明神、般若十六善神、普照日天子」などを読み上げた。これも神仏和合の実態そのものである。奈良東大寺「修^{しゅにえ}二会」の儀式に通じるものがある。また、同住職は、仏壇のある部屋は神仏と共にある修行道場である、とおっしゃられている。納得、至言だと思う。

同寺住職による「お日待ち」を授かっているお宅は、必ずしも檀家・檀徒とは限らない処が面白い。

付録だが、西川町岩根沢の岩根沢三山神社において、「お日待ち」加持祈祷儀礼を今も行っているということである。

ところで、石行寺を菩提寺とした理由について、同寺の宗派は天台宗である。父親の生前、高齢になりつつあったことから寺探しをした。石行寺までは私の自宅から直線距離 700m ほどだが、それよりも近い 460m の所に曹洞宗耕源寺がある。本当は耕源寺を狙ったのだが、檀家が多い大規模寺院であること、また、当時相続でゴタゴタしているとの噂もあり、そこは却下！ 石行寺を選択したということである。つまり、宗派うんぬんにはまったく関心がなかったということ、自宅から近ければ何宗でも良かったということである。

どこにでもある集落の共同墓地にあっては、様々な宗派の墓石が立ち並んでいる、玉石混交、混然一体という様相である。思想信条や信教の違いはともかくとして、春・秋の彼岸、夏お盆の時期には同じように墓参りをする、日本全国どこでも同じ風景であろう。これは、新渡戸稲造のいう武士道精神に育まれた大和民族・多神教民族の真骨頂、大寛容性といった面であろう。

(end)